芥川龍之介全集

第三巻

昭和三年六月十五日印刷
昭和三年六月二十日發行

芥川龍之介全集第三卷

著作者　芥川龍之介
發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話九段(33)一〇二二番　一〇二二番
振替口座東京七四一六番

（寺島製本）

第三卷目錄

秋山圖　起　一頁
山鳴　起　二一頁
奇怪な再會　起　四一頁
アグニの神　起　九一頁
妙な話　起一一三頁
奇遇　起一二五頁
往生繪卷　起一四一頁
母　起一五一頁
好色　起一七五頁
藪の中　起二〇一頁
將軍　起二二一頁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俊寛　起二五九頁
トロッコ　起二九三頁
報恩記　起三〇五頁
仙人　起三三五頁
庭　起三四五頁
一夕話　起三五九頁
六の宮の姫君　起三七五頁
お富の貞操　起三九一頁
おぎん　起四一一頁
百合　起四二三頁
三つの寶　起四三七頁

神神の微笑　起四五七頁
老いたる素戔嗚尊　起四七九頁
雛　起五〇九頁
猿蟹合戰　起五三五頁
二人小町　起五四一頁
おしの　起五五九頁
保吉の手帳から　起五七一頁
白　起五九一頁
お時儀　起六〇九頁
あばばばば　起六一九頁
魚河岸　起六三五頁

子供の病氣　起六四三頁
一塊の土　起六五五頁
糸女覺え書　起六七七頁
不思議な島　起六九三頁
傳吉の敵打ち　起七〇九頁
三右衞門の罪　起七二一頁
金將軍　起七三九頁

秋山圖

「――黄大癡と云へば、大癡の秋山圖を御覽になつた事がありますか？」

或秋の夜、甌香閣を訪ねた王石谷は、主人の惲南田と茶を啜りながら、話の次手にこんな問を發した。

「いや、見た事はありません。あなたは御覽になつたのですか？」

大癡老人黄公望は、梅道人や黄鶴山樵と共に、元朝の畫の神手である。惲南田はかう云ひながら、嘗て見た沙磧圖や富春卷が、髣髴と眼底に浮ぶやうな氣がした。

「さあ、それが見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、不思議な事になつてゐるのですが、――」

「見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、――」

惲南田は訝しさうに、王石谷の顏へ眼をやつた。

「模本でも御覽になつたのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。兎に角眞蹟は見たのですが、――それも私ばかりではあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

りません。この秋山圖の事に就いては、煙客先生(王時敏)や廉州先生(王鑑)も、それぞれ因縁が御有りなのです。」

王石谷は又茶を啜つた後、考深さうに微笑した。

「御退屈でなければ話しませうか？」

「どうぞ。」

惲南田は銅槃の火を搔き立ててから、慇懃に客を促した。

× × × × × ×

元宰先生(董其昌)が在世中の事です。或年の秋先生は、煙客翁と畫論をしてゐる内に、ふと翁に、黄一峯の秋山圖を見たかと尋ねました。翁は御承知の通り畫事の上では、大癡を宗としてゐた人です。ですから大癡の畫と云ふ畫は苟くも人間にある限り、看盡したと云つてもかまひません。が、その秋山圖と云ふ畫ばかりは、終に見た事がないのです。

「いや、見る所か、名を聞いた事もない位です。」

煙客翁はさう答へながら、妙に恥しいやうな氣がしたさうです。

「では機會のあり次第、是非一度は見て御置きなさい。夏山圖や浮嵐圖に比べると、又一段と出色の作です。恐らくは大癡老人の諸本の中でも、白眉ではないかと思ひますよ。」

「そんな傑作ですか？　それは是非見たいものですが、一體誰が持つてゐるのです？」

「潤州の張氏の家にあるのです。金山寺へでも行つた時に、門を叩いて御覽なさい。私が紹介狀を書いて上げます。」

煙客翁は先生の手簡を貰ふと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろさう云ふ妙畫を藏してゐる家ですから、其處へ行けば黄一峯の外にも、まだいろいろ歴代の墨妙を見る事が出來るに違ひない。――かう思つた煙客翁は、もう一刻も西園の書房に、ぢつとしてゐる事は出來ないやうな、落着かない氣もちになつてゐたのです。

所が潤州へ來て觀ると、樂みにしてゐた張氏の家と云ふのは、成程構へは廣さうですが、如何にも荒れ果ててゐるのです。墻には蔦が絡んでゐるし、庭には草が茂つてゐる。その中に鷄や家鴨などが、客の來たのを珍しさうに眺めてゐると云ふ始末ですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名畫があるのだらうかと、一時は元宰先生の言葉が疑ひたくなつた位でした。しかしわざわざ尋ねて來ながら、刺も通ぜずに歸るのは、勿論本望ではありません。そこで取次ぎに出て來

た小斷に、兎も角も黄一峯の秋山圖を拜見したいと云ふ、遠來の意を傳へた後、思白先生が書いてくれた紹介狀を渡しました。

すると間もなく煙客翁は、廳堂へ案内されました。此處も紫檀の椅子机が、清らかに並べてありながら、冷たい埃の臭ひがする、――やはり荒廢の氣が鋪甎の上に、漂つてゐるとでも云ひさうなのです。しかし幸ひ出て來た主人は、病弱らしい顔はしてゐても、人がらの惡い人ではありません。いや、寧ろその蒼白い顔や華奢な手の恰好なぞに、貴族らしい品格が見えるやうな人物なのです。翁はこの主人と一通り、初對面の挨拶をすませると、早速名高い黄一峯を見せて頂きたいと云ひ出しました。何でも翁の話では、その名畫がどう云ふ譯か、今の内に急いで見て置かないと、霧のやうに消えてでもしまひさうな、迷信じみた氣もちがしたのださうです。

主人はすぐに快諾しました。さうしてその廳堂の素壁へ、一幀の畫幅を懸けさせました。

「これが御望みの秋山圖です。」

煙客翁はその畫を一目見ると、思はず驚嘆の聲を洩らしました。

畫は青綠の設色です。溪の水が委蛇と流れた處に、村落や小橋が散在してゐる、――その上に起した主峯の腹には、悠悠とした秋の雲が、蛤粉の濃淡を重ねてゐます。山は高房山の横點を重

ねた、新雨を經たやうな翠黛ですが、それが又硃を點じた、所所の叢林の紅葉と映發してゐる美しさは、殆ど何と形容して好いか、言葉の着けやうさへありません。かう云ふと唯華麗な畫のやうですが、布置も雄大を盡してゐれば、筆墨も渾厚を極めてゐる、――云はば爛然とした色彩の中に、空靈澹蕩の古趣が自ら漲つてゐるやうな畫なのです。

煙客翁はまるで放心したやうに、何時までもこの畫に見入つてゐました。が、畫は見てゐれば見てゐる程、益神妙を加へて行きます。

「如何です？　御氣に入りましたか？」

主人は微笑を含みながら、斜に翁の顏を眺めました。

「神品です。元宰先生の絕賞は、たとひ及ばない事があつても、過ぎてゐるとは云はれません。實際この圖に比べれば、私が今までに見た諸名本は、悉下風にある位です。」

煙客翁はかう云ふ間でも、秋山圖から眼を放しませんでした。

「さうですか？　ほんたうにそんな傑作ですか？」

翁は思はず主人の方へ、驚いた眼を轉じました。

「何故又それが御不審なのです？」

「いや、別に不審と云ふ譯ではないのですが、實は、――」

主人は殆ど處子のやうに、當惑さうな顏を赤めました。が、やつと寂しい微笑を洩すと、怯づ怯づ壁上の名畫を見ながら、かう言葉を續けるのです。

「實はあの畫を眺める度に、私は何だか眼を明いた儘、夢でも見てゐるやうな氣がするのです。成程秋山は美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？　私以外の人間には、平凡な畫圖に過ぎないのではないか？――何故かさう云ふ疑ひが、始終私を惱ませるのです。これは私の氣の迷ひか、或はあの畫が世の中にあるには、餘り美し過ぎるからか、どちらが原因だかわかりません。が、兎に角妙な氣がしますから、ついあなたの御賞讃にも、念を押すやうな事になつたのです。」

しかしその時の煙客翁は、かう云ふ主人の辯解にも、格別心は止めなかつたさうです。それは何も秋山圖に、見惚れてゐたばかりではありません。翁には主人が徹頭徹尾、鑑識に疎いのを隱したさに、胡亂の言を並べるとしか、受け取れなかつたからなのです。

翁はそれから少時の後、この廢宅同樣な張氏の家を辭しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覺めるやうな秋山圖です。實際大癡の法燈を繼い

だ煙客翁の身になつて見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたいと思つたでせう。のみならず翁は蒐集家です。しかし家藏の墨妙の中でも、黄金二十鎰に換へたと云ふ、李營丘の山陰泛雪圖でさへ、秋山圖の神趣に比べると、遜色のあるのを免れません。ですから翁は蒐集家としても、この稀代の黄一峯が欲しくてたまらなくなつたのです。

そこで潤州にゐる間に、翁は人を張氏に遣はして、秋山圖を讓つて貰ひたいと、何度も交渉して見ました。が、張氏はどうしても、翁の相談に應じません。あの顏色の蒼白い主人は、使に立つたものの話によると、「それ程この畫が御氣に入つたのなら、喜んで先生に御貸し申さう。しかし手離す事だけは、御免蒙りたい」と云つたさうです。それが又氣を負つた煙客翁には、多少癇にも障りました。何、今貸して貰はなくても、何時かはきつと手に入れて見せる。――翁はさう心に期しながら、とうとう秋山圖を殘したなり、潤州を去る事になりました。

それから又一年ばかりの後、煙客翁は潤州へ來た次手に、張氏の家を訪れて見ました。すると墻に絡んだ蔦や庭に茂つた草の色は、以前と更に變りません。が、取次ぎの小廝に聞けば、主人は不在だと云ふ事です。翁は主人に會はないにしろ、もう一度あの秋山圖を見せて貰ふやうに賴みました。しかし何度賴んで見ても、小廝は主人の留守を楯に、頑として奥へ通しません。いや、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com